

## 〈講評〉OSAKA☆みらいシティは子どもの社会参画の象徴

千葉大学大学院園芸学研究科教授 木下 勇

### 子どもの参画は持続可能な社会形成に向けた主要課題

持続可能な開発目標（SDGs）は国連によって定められた各国が取り組むべき共通目標となっています。「子どもにやさしいまちづくり」（Child Friendly Cities Initiative、以下「CFC」という）もそのための重要な取り組みとして各国で機運が高まっています。「子どもの参画」を第一の柱とした、ユニセフ関連のプログラムですが、SDGsの枠組みに入ってから先進国の国内委員会もそのミッションを帯びるようになりました。今、日本でもその自治体のネットワークを形成しつつあります。大阪でもそれに向けた取り組みが行政やNPO、企業等に求められてくるでしょう。とりわけSDGsの中の「11.住み続けられるまちづくり」において、少子高齢化の課題をかかえる自治体は高齢者福祉の負担と同時に、子どもに向けた取り組みをしないと持続可能性がゆらいでいきます。子どもの参画に熱心に取り組む自治体が将来には生き残ると言っても過言ではないでしょう。

### 子どもの参画の象徴としての「子どものまち」

子どもにやさしいまちの優良事例といわれるミュンヘン市はまたOSAKA☆みらいシティのモデルの「ミニ・ミュンヘン」発祥のまちでもあります。CFC担当職員は、「ミニ・ミュンヘンはCFCの象徴」と言います。確かに子どものまちはそれが、大きなごっこ遊びとも言え、全て大人社会の模倣とはいえず子どもたち自身が全て大人と同じように行おうとするわけですから、あらゆる分野における子どもの参画となります。ミニ・ミュンヘンでは各働く場所に大人のプロもいるわけですから、子どもたちはホンモノに出会い、見事な社会参画の経験を積むこととなります。

### 準備・企画段階からの子どもたちによる子どものまち

ミニ・ミュンヘンに比べて、日本の子どものまちは開催期間が1～2日と非常に短いですが、準備段階から子ども参画で進めているところが多いのが特色です。OSAKA☆みらいシティもそのように企画準備から子どもリーダーとして関わった子どもたちと当日参加の子どもたちに、催しの前後で意識がどう変わったかを調べました。その結果、意外な結果が出ました。OSAKA☆みらいシティはキャリア教育の期待もあり、労働や仕事への関心の変化を調べました。「将来は働かないで楽をして暮らしたい」と思う子どもリーダーの子どもたちは、催しの前と後では、そう思うという子が減るかと思ったら、逆に増加したのです。むしろ当日参加だけの子どもたちの方が働くことに意欲を持つ、逆転現象かのよう。実は、家で仕事について尋ねる子どもリーダーは増えていまして、働くことの大変さを実感しながら仕事への関心が高まって、より実社会に関心が高まっているのかもしれない。

### はたらく「ホンモノ」体験

ミニ・ミュンヘンでは準備は大人たち、いわばテレビゲームなどよりも面白いワクワクする遊びの体験の場を用意するプロの集団が行います。その代わりに、開催期間の3週間の間に、子どもたち自身で働き、ミニ・ミュンヘン市を運営する、大人社会のホンモノに迫る参画であり遊びの場が営まれます。各働く場にはホンモノのプロが数人はついています。日本で広がった子どものまちは、最初はなかなかそういうプ

ロの協力を得るまでいたっていなかったのですが、とさつ子タウンなど、最近、よく見られるようになりました。ミニ・ミュンヘンのように3週間の開催だったらそういうプロの協力を得るのはたいへんかもしれませんが、2日程度だったら可能かもしれません。OSAKA☆みらいシティも新聞記者、消防士、薬剤師、看護師、和菓子職人、アーティスト、ダンサー、カフェの店長、保育士、幼稚園教諭、教員、工房の職人などの本職で、子どものこと、この事業の趣旨を理解してくださる方々の協力を得られて実施できたことは、大人が何かをしなければ伝わらない今の子どもの置かれている状況への理解や、さらなる連携につながるかもしれません。

## 多様な人間、世代間のコミュニケーション能力を高める

子どもリーダーには友達と仲良くする力などコミュニケーションの力もついているようです。大人との会話を楽しんでいる子どもたちも半数以上はいます。子どもたちの提案を発表した大人とのワークショップでは、子どもたちの言葉の「ゴロゴロ」(P.34 参照)に関心を寄せた大人たちが多くいました。その背後の子どもたちの心を知ろうとする努力を示していることに好感が持てたのかもしれません。子どもたちが思いっきり自分たちで考えたことをやって、それに大人が反応することで、子どもたちと大人の信頼関係が生まれてくる。そのように、OSAKA☆みらいシティが未来に持続可能なまち、つまり大阪のSDGsの一つの取り組みとして大手をふって自慢できるように浸透するといいいですね。

## 子どもの権利を保障する大人

OSAKA☆みらいシティでは「子どもの権利条約」をよく理解し、条約12条、13条関連での子どもの参画にも精通している方々が大人スタッフに加わりました。ミニ・ミュンヘンの主催者のNPO Kultur & Spielraum e.V. (文化&遊び空間)は条約31条つまり遊びの権利を保障するNPOとして市、連邦、または国際的にも認識されています。彼らにしてみれば、遊びは参画を包含します。子どもは面白く、ワクワク楽しくなければ参加しません。遊びが主体的な学びでかつ社会参画です。ミニ・ミュンヘンは実社会を真似る大きなごっこ遊びですが、そこに実社会への子どもの参画の大きな動機付けが仕込まれています。それであれば3週間も続けて来る子どもはいないでしょう。毎回ボランティアで来る警察官に聞くと、彼自身が面白いから来ていると言います。前回のミニ・ミュンヘンでの出来事。子どもの警察がしっかり仕事しないから治安が悪くなった、警察官はしっかり仕事すると市民の一大デモが起こったので、大人スタッフの本物の警官の彼に「この事態をどうみるか」と聞いたところ、彼は「子どもに任せているので、口出しはしない」と笑って答えていました。

遊びの権利、参画の権利にしる、大人は言葉ではなく、態度で子どもたちの権利を保障する役割を担います。OSAKA☆みらいシティの大人スタッフはみらいシティの本番に向けての準備段階で子どもの参画を保障する態度を子どもたちに示していたのだと思います。その気持ちが伝わっていることはふりかえりの時に感じたものです。

あと、欲を言えば、笑いの文化のある関西ならではの、または「じゃりんこチエ」的なけったいな大人がいるような、大人も子どもの距離が近いというか、大人と子どものギャップがない、遊んでいる世界の同じ仲間感覚がもっとあってよいかと思いましたが、それは関東からの偏見だったらお許しください。